

名誉顧問のコモンセンス

二律背反 表裏論 8

諺か、道歌か？

会田雄次を読む



「諺」(ことわざ)の効果

本棚に、昔愛読した本が見つかりとついたりあげて読み始めてしまう。当時、毒舌家で有名な会田雄次の『リーダーの条件』(昭和54年7月新潮社から刊行)を開いて見ていたら、「人間を作る教育とは」の題で、気になることが書かれていました。「諺」(ことわざ)の効果について、「人生の叡智ともいべき深い洞察がこめられたものが多い」と誉めている箇所です。

「この種の『いろはかるた』は、いわゆる諺かるたである。日本の古い時代、とくに江戸時代の諺の多いこと驚くほどで、それをちょっと拾ってゆけば『諺いろはかるた』など百や二百はすぐ作れるといっても過言ではないほどだ。森田誠吾さんも指摘しておられるように、例えば式亭三馬の『浮世風呂』ではわずか四百八十字の文章の中に、二十一つの諺がちりばめられている。しかも、[多くのコトワザが入っている]その文章はなんの無理も感じられない。いかに諺が江戸の人々の血となり肉となっていたかを証明する好例であろう。ところで問題は、こういう諺が **明治に入るとともに 急速に忘れられ、使われなくなっていく** ということである。新しく作られた諺が一般に普及するということもなくなった。同時に古い諺で、私たちには容易にその意味がわからなくなってしまったものも多い。『犬も歩けば』もその一例だが、例えば『三文銭か生爪か』『われ鍋にとじぶた』『月夜に釜を抜く』『喧嘩過ぎての棒ちぎれ』等々がその例である」。

「こういう難句の中でも、例えば『幽霊に浜風』などは『青菜に塩』と同じ意味で、強い風でへなへなになることだと解釈してもらえばなるほどとわかる。そしてこれは幽霊などこちらが怖がるから調子にのるので、こちらさえ強く出ればすぐ負けて退散するもの、やくざなどもそれと同じだという教訓だといわれると、たしかにと合点がゆく。しかし、『月夜に釜を抜く』となると研究者の意見もまちまち。つまり、**もう永久にわからなくなってしまう** といって差しつかえない」。

コトワザの二律背反 なるほど、コトワザは分かりやすい言葉でできていますが、その真の意味は分かりづらいのです。これは矛盾です。言葉は分かりやすいが、意味は難しい——これも二律背反の好例です。でも、当然、その時代には意味もよく分かったのです。意味が分かり易いようで分かり難いのは、その時代の限られた仲間だけに分かればよかったからです。お互いが、注意・牽制しあって生きていたからです。コトワザの多くは、狭い共同体が生育していくなかでの「エチケツ集」をなすものであったのでしょう。

「なぜ、このように昔は諺が多く、現在減ってしまったのか。今では意味がわからなくなった諺がたくさんできてきたのか。その理由を正確に説明してくれる人はどうも見当たらないようである。もちろん私にもはっきりわからない。ただこういうことは指摘できそうである。諺が盛んだったのは、なにも日本だけのことではない。ヨーロッパでも中世も末期となれば、これも驚くほどの諺があった。諺というのはえらい哲学者や聖賢の吐いたいわゆる金言名句ではない。**民衆の生んだ人生の知恵というべきもの** である。だから、**民衆の台頭期** には洋の東西を問わず、どこでも大変盛んになる。そしてこういう諺は、えらい人々の金言名句や、宗教者の説教と並んで人々を教育したのである。いや並んでとか、共にと、いうと正確ではないだろう。むしろ逆だ」。

「民衆の台頭期」とは、良い判断です。都会や町や田舎や農村で、新しい共同体が作られていくときに必然的にコトワザも生まれて来たのでしょう。なんといっても、日本は、俳句や和歌や川柳の国です。短い言葉で、「寸鉄人を刺す」のは得意です。

「お上、今の言葉でいえば、いやな言葉だが『体制』の方からの説教だとか、金言名句とかいう教えに対して、**民衆の生んだこの知恵** で批判したり、茶化したり、うまくいなしたり、たくみに対応したりする手段として使われることが多かったのだといえる。したがって、こういう諺は、**民度はかなり向上してきている** のに、学校などの大衆教育制度がまだ整っていない時代に盛んになり、義務教育など大衆教育が普及してくるのに反比例して減ってゆくというのが普通のようなものである。つまり、諺というのは、親が子に、大人が子供に、老人が若者に、人生に生きる知恵を与えるべく家庭、集会所、共同作業の際など、**あらゆる機会に繰り返し繰り返し、その頭の中にたたきこんでいったもの** なのだ。だから、その諺は当時の人々の心の中に生きていた。当時人は、事の大小にかかわら

ず、この諺の教えに頼って決断したり、工夫したり、あきらめたりして人生を生きていったのである」。

「コトワザによって人生を生きていった」 — とは、また、会田さんも大きく出たものです。そういえば、私たちはいまでも、このホームページを読む時などに、「牛を馬に乗り換える」や「無芸大食」や「瑠璃も玻璃も照らせば光る」などと言ってみたくなるものです。

反省のときに思い出す 諺は、人生の、民間の、共同生活の知恵だったのですね。共同体の規則として覚えて欲しいから、分かりやすい言葉を使い、日頃、やっていない少し非常識な行為にたとえて、頭に残るように考えさせたのです。日々の行動の指針です。時には、落語のオチのように、明るくて、洒落ていて、だれも傷つけないように出来ているのです。ただ、「損して得(とく)取れ」や「早起き三文の得」や「知に働けば角が立つ」などなどは、覚えやすくはありますが実行しづらいものがあります。特に失敗して反省する時に思い出されるものが多いのは、「良薬口に苦し」です。

「ところで大切なのは、こういう諺は体系的知識でこそないが、**人生の叡知ともいえるべき深い洞察がこめられたものが多い** という事実である。近代の学校教育は体系的知識は教えるが、人間の思考力を訓練することはしないし、人生の叡知を子供の頭脳にたたきこむことなど全くできない。この意味において、**諺の消滅、意味の不明化** は、私たちの社会で **人生教育がなくなり、人生の叡知が次第に消滅していつていることの証明** である。現代の人々の思想と行動が幼児化してきているのも当然ではなかろうか。近代の教育は人を『生活の技術者』にはするが、『大人』にはできないからである」。

なるほど、そういうわけだったのですか……。報徳先生の著書や諭吉翁の『学問のすゝめ』などは、改めて、人々を大人に育てようと「人生教育」をほどこさんとするものです。それで、啓蒙家のお二人の本に、「コトワザ」のような言葉がおおいのですね。

下手な歌 そういえば、特に、報徳先生の『報徳記』と『二宮翁夜話』には、先生が、日々、つぶやいた四書五経からの引用文や自作の短歌が数多く載っているのに気がつきます。これは、会田雄次さんがいう「ことわざ」の部類に属するものでしょう。すなわち、「人生の叡智ともいえるべき深い洞察がこめられたものが多い」のです。特に歌は、むろん、本人も自覚していることですが、余り上手なものではありません。それもそのはず、何かを教えようとする教訓的な「道歌」であるからです。時には、儒教や古典からの引用文も、一般の解釈と違って、理屈っぽいものが多いのです。でも、この得手・勝手な引用文や短歌が、返って報徳先生の言わんとする真意を短く的確に伝えているのです。特に、先生が笑いながらあえて自作を披露するのは、「体系的知識でこそないが、人生の叡知ともいえるべき深い洞察がこめられたものが多い」からです。それに、一度聞いたら忘れません。報徳先生自作の「三度たく 飯さえこわし やわらかし 思うままには ならぬ世の中」など覚えやすいです。意味もよく分かります。そして、極めて「教訓的」で、働き手にとって身近な題材であり、日々の、ままたらぬ庶民の生活の思いに同情して言っているのです。そしてそこには、常に「仁」があります。

では、報徳先生ご自慢の歌をふくめて、いくつかみていきましょう。

1 音もなく ^{かおり}香りもなく 常に天地は ^{きょう}書かざる 経をくりかえしつつ

なんとも下手な歌です。『二宮翁夜話』の巻頭にあります。これも、報徳先生・お馴染みの自然賛歌です。「天の道」の教えは、音もせず、匂いもしないので気づき難いが —

「誠の道というものは、学ばないで自然に知り、習わないでおのずから覚え、書籍もなく記録もなく、師匠もなく、しかも人々がおのずから心に悟って忘れない、これこそ誠の道の本性である。のどがかわけば水を飲み、ひもじくなれば食らい、疲れば眠り、目がさめれば起きるというのも、みなこれと同じことである」。

まず報徳先生は、「人生における誠の道は、日々の生活にある。特に、人から習ったり、本を読んで知ることではない」といいます。人間が考えたり、書いたり、作ったりするものよりも、身近にある日々の生活のなかに「誠の道」はあるというのです。「それに気がつかず、知らないだけだ」。そのことを、ことわざならぬ、和歌で教えたのです。

「古い歌に、**水鳥の ゆくもかえるも跡たえて されども道は 忘れざりけり** とあるようなものである。記録もなく、書籍もなく、学ばず習わず、それで明らかな道でなければ誠の道ではない。私の教えは、書籍を尊ばず、天地を経文としている」。

【『二宮翁夜話』第一話】

「自然の移ろいをよく知って、感謝しなさい」と報徳先生は言うのです。記録や書籍を知らなくても、日々の生活のなかで分かることが多い — それを知り、それを感じなさいというのです。特に、難しい学問はなど要りません。この古歌を覚えていれば良いのです。そして、時々思い出し、仲間と話すときにもこの古歌を引用すれば良いのです。

「私の歌に、**音もなく 香もなく 常に天地(あめつち)は 書かざる経を くりかえし**と詠んでいる。このように、日々くりかえしくくりかえし示される天地の経文に、誠の道は明らかである。こういう尊い天地の経文を外にして、書籍の上に道を求める学者たちの論説は私のとらないところである。よくよく目を開いて天地の経文を拝見し、『これを誠にする』道を尋ねるべきである」。

【同】

自然の法則から学ぶ 書籍を読むだけの学者に対して、報徳先生は実践家です。「日々、実際に自然の進化や変化をみて、『自然の法則』を学びなさい。そこにこそ、誠の道はある」と説くのです。

「いったいこの世界で、横に水平なものは水面である。縦に垂直なものは垂針である。すべてこのように、永久に動かないものがあるから、地球の測量もできるわけで、これがないでは測量の術もない。暦道で日かげ柱を立てて日ざしを測る法も、算術の九々のごときも、みな **自然の法則** で永久不変のものである。これによって、天文を考えることもでき、暦法を算することもできるわけで、これを無視してはいかなる智者でも術を施す方法がないであろう。私の説く道もまた同じである。天は何も言わず、しかも四季がめぐって万物が生育するところの、**書籍のない経文 言葉のない教戒** で、**米を蒔けば米がはえ、麦を蒔けば麦が実る** ような、永久不変の道理によって誠の道に基づいて、誠にする勤めをするべきである」。

【同】

「自然の法則から学ぶ」とは、日頃、当たり前だと思っていることを、改めて「なぜか？」と不思議に思い、その理由を考えることです。そしてそれを、日頃の生活の働きに当てはめて、「自然が知らせてくれている誠の道だ」と思うことです。「米を蒔けば米がはえ、麦を蒔けば麦が実る」ではないか — と言われればその通りです。これが、人間にとって一番大切な「食料は自然からの恵みである」と知り、自然に感謝しながら、自然と共に生きることが「誠の道」です。「自然の永久不変の道理による誠の道に基づいて、日々の農作の勤めをするべきである」と説くのです。すなわち、「勤農のすゝめ」です。まず、だれかから教わるのではなく、農民自らがそのことに気がついて欲しいというのです。報徳先生の教えが詰まった『二宮翁夜話』の巻頭は、この「誠の道」のお話とこの「書かざる

経」の歌で始まります。この歌は、「譬え話」であり共同体の「コトワザ」でもあるのです。日々、勤農に励み、「拳々服膺すべし」― です。[けんけんふくよう:しっかりと心に銘じて守り行うこと。「拳拳」は大切に捧げ持つこと。「服膺」はよく覚えて忘れないこと]。

でも、ここで矛盾を感じるのは、報徳先生ご自身が「四書五経」で学びながら、農民たちに学問を捨てて勤農に励めよと説いたことです。これこそ「二律背反」です。でも、この箇所では、学問そのものを無駄の対象にしたのではなく、教える側の学者の不明を問題にしたのでしょう。それなら、分かります。

2 捨て果てて 身はなきものと思えども 雪の降る日は 寒くこそあれ 礼に非ざれば 視ることなかれ 聴くことなかれ 言うことなかれ 動くことなかれ

報徳先生は、むろん、自分の解釈や自作の歌が独自のものであって、「独学のでっち上げだ」と世間の大方の批判を浴びていることは重々承知しています。でも、それは「ため」にやっているのだと報徳先生は開き直ります。

翁はこう言われた ― 「仏教家は、この世は仮の宿で来世こそ大切だというが、現在君親もあり妻子もあるのをどう出来よう。たとえ出家遁世して、君親を捨て妻子を捨てても、この身体のあるかぎりどうにもならない。身体があれば、食と衣の二つがなければしのぐことができず、船賃がなければ海も川も渡ることができない世の中だ。だから西行の歌に **捨て果てて 身はなきものと思えども 雪の降る日は寒くこそあれ** といっている。これが実情だ」。

【『二宮翁夜話』第二二七話】

世間では、例えば、仏教家の教えなどは実情に合わない。西行の歌で述べていることの方が本当なのだ ― と、先生は弁解します。

「儒道(『論語』顔淵篇)では、**礼に非ざれば 視ることなかれ 聴くことなかれ 言うことなかれ 動くことなかれ** と教えるが、通常おまえたちのうえでは、それでは間に合わない。それゆえ私は、**自分のためになるか 人のためになるか** でなければ、視るな、聴くな、言うな、動くなと教えるのだ。自分のためにも人のためにもならないことは、経書にあらうが経文にあらうが、私はとらない。だから、**神道とも 儒道とも 仏道とも 違うことがあらう**。これは私の説が間違っているのではない。そこをよくよく玩味しなさい。

真の実学と仁 「自分のためになるか 人のためになるか」とは、「仁」のことです。また、『仁』と言っても、論語などの儒教の優れた本やお経や宗教など説く教えは実情に合わない。それで私は、お前たち農民に分かり易く、実情に合った言い方で話をしているのであって、それが学者や世間がいうことと違っているかも知れないが、承知の上で述べていることだ」と、開き直っています。諭吉翁のいうこれが「実学」です。報徳先生は、自分のためになり、他人(ひと)のためになるのが真の学問であり、これこそ、孔子の「儒道」であり、日本の「神道」であり、インドの「仏道」なのだというのです。これが、報徳先生のいう「仁」です。農民たちが守るべき生活の規範です。まず、実践です。「他人のためになることが自分のためになる」という教えです。共同体の教えです。いまでいう「コモン」(common :共同体・一緒に遣い護る共有地)です。名古屋モーツァルト協会の名誉顧問(コモン)への教えでもあります。(笑い)

3-A 郭公(ほととぎす) 鳴きいる方をながむれば 只 有明の月ぞ残れる

古歌の名歌を解釈したものもあります。

翁はこう言われた — 「この歌の心は、たとえば繁華であった鎌倉も、いまはただ跡だけが残ってものさびしいありさまであると、感慨の心を[後徳大寺左大臣が]詠んだものである。ただ鎌倉だけではない。人々の家もまた同じだ。今日は家・蔵が建ち並び、人が多く住んで賑やかであっても、ひとたび行き違えば破産することとなり、屋敷だけが残ることになる。恐れなくてはならない。慎まなくてはならない。すべて人が造った物は、事あるときはみな亡びて、残るものは天造物だけであるという心を含んで詠んだものだ。よく味わってその深い意味を知るがよい」。

【『二宮翁夜話』 第一五七話：「事あれば人造物は亡ぶ」】

3-B 春は花 秋は紅葉と夢うつつ 寝ても醒めても 有明の月

「有明の月」の第2段です。

「この歌はどういう意味ですか」とある人が尋ねた。

本当によく分からない歌です。結局、「有明の月」の真意が分からないのです。

翁はこう言われた — 「これは色即是空・空即是色という心を詠んだものだ。色とは肉眼に見えるものをいう。天地間の新羅万象がこれである。空(くう)とは肉眼に見えないものをいう。いわゆる「玄[黒・闇・見えないところ]のまた玄」(『老子』)というのもこれである。世界は循環変化の理で、空は色を顕わし、色(しき)は空に帰する。みな循環のために変化しないわけにはいかない。これが天道である。いまは野も山も真っ青であるが、春になれば梅が咲き、桃・桜が咲き、美しく咲き誇り、また香り豊かに咲きにおう。それも見る間に散ってなくなり、秋になると麓は染まり、峰も紅葉し、実に錦繡のようだと眺めていると、夜木枯しが吹けば見る影もなく散ってなくなる。人もまた同じで、子供は育ち、若年は老年になり、老人は死ぬ。死ねばまた生まれて新陳交代する世の中である。だからと言って悟ったために花が咲くのもなく、迷ったために紅葉が散るのでもない。悟ったから生まれるのもなく、迷ったから死ぬのでもない。悟っても迷っても、寒いときは寒く、暑いときは暑く、死ぬ者は死に、生まれる者は生まれて、**少しも関係がない** から、これを寝てもさめても[朝になっても未だぼんやりと天空に残っている]有明の月と詠んだのである。特別な意味があるわけではない。悟道(ごどう:心の迷いが解けて仏教の真理を会得する)というものも特に益のあるものでないということを詠んだのだ」。

【『二宮翁夜話』 一四八話：色即是空の理】

夜明けになってもまだ天に残っている「有明の月」も、報徳先生に掛かっては特に意味のあるものでなくなります。困ったものです。でも、なんだかよく分かるような気がします。すんでしまったのに、ぼんやりとただ一人、ポツカリと浮かんでいる有明の月のような未練がましきは、いつの世にもあるものです。でも、「悟っても迷っても、少しも関係がない」 — この解説によって、「悟道」しない人間の未練がましきは消えます。常に、「有明の月」「ありあけのつき」「アリアケノツキ」をお題目(おだいもく)にして、他人を羨ましがらず、自分の失敗を悔やまないようにしましょう。良い歌です。「**ほととぎす 鳴きつるあとにあきれたる 後徳大寺の有明の顔**」と先のこの歌の作者をからかって詠んだのは狂歌師大田南畝(蜀山人・四方赤良よものあから)です。後徳大寺も、悟道しなくていいのです。

捨てない物を拾う

先生の教訓的な「道歌」のなかには、よく意味の分からないものも含まれています。次の歌も、そうです。

4 むかしより 人の捨てざるなき物を 拾い集めて 民に与えん

翁の歌に、「むかしより 人の捨てざるなき物を 拾い集めて 民に与えん」とあるのを、代官の山内董正(ただまさ)氏が見て — 「これは人の捨てたと言うべきだ」と言われた。

先生の発明語 ここでの「人の捨てざるなき物」とは、余り聞いたことはありません。先生の発明した独自の言い方です。この言葉を見つけるのに先生も苦労したことでしょう。造語なので、誤解をまねきやすい言葉です。「もう、要らないので捨てても良いのに、まだ、大事に持っていて捨てないでいる物」のことなのです。「捨ててもいいのに持っている」 — これも「二律背反」です。なるほど、人が捨てた物ならば、だれでも拾うことが出来ますが、まだ、捨ててなくてしっかり持っているものを拾うことなどできません。「捨てたものではなく、まだ捨ててない物を拾うとはどういうことですか？」と山内氏が疑問に思うのも当然です。翁の言葉が間違っているのでしょうか。でも、「間違いを言っているのではない。これでいいのだ」と報徳先生はいいます。どういうことでしょうか？

翁が言われるには — 「そう言うときは、人が捨てなければ拾うことができず、[捨てれば拾えるとなって] はなはだ [当たり前になり意味が] 狭くなります。かつ、捨てたものを拾うのは僧侶の道で、私の道ではありません。古歌に、『世の人に 欲を捨てよと勧めつつ 跡より拾う 寺の住職』と言っています」。

それは、その通りです。捨てなければ拾えません。また、「人が捨てた物を拾うのはお坊さんのすることだ」と先生は、皮肉をいいます。

董正氏が言うには — 「それならば、捨てざるなき物とは何か」

実は、先生は、「早く捨てれば良いのに、なにか理由や執着があって、どうしても捨てない物のことだ」といいたいのです。

翁は言われた — 「世の人が捨てないもので、ない物は至って多くて、一々あげきれません。第一に荒地、第二に借金の雑費と暇つぶし、第三に富人の驕奢(きょうしゃ:ぜいたく)、第四に貧人の怠惰(たいと)などです。荒地などは捨てたようなものですが、開墾(かいくわん)しようとすれば必ず持主(もしゅ)があって容易(りょうい)に手をつけることができない。これがすなわち、[実際には] 無い物で、捨てた物ではないのです。また借金の利息・借替(かりかえ:返済しないで借りを更新する)・成替(なしかえ:一度返済して再度借用する)の雑費も同じ類で、捨てるのではなく、[ただじっと抱えたままにしておいて出さないで外には] 無いものです。そのほか富人の驕奢の出費、貧者の怠惰の出費も同じです。世の中ではこのように、捨てるのではなく、廃(すた)れて無に属する物がいくらかありましよう。よく拾い集めて国家を興す資本とすれば、広く救済されて余りがありましよう。人の捨てない物で、無い物を拾い集めるのは、私が幼年から勤めている道で、今日にいたった原因です。すなわち私の仕法金の根本にあります。よく心を用いて拾い集めて世を救うべきです」【『二宮翁夜話』第九十一話】

報徳先生の怨望 これで、「捨てざるなき物」の意味が分かりました。「どれも、だれかがまだ、未練(みれん)がましくもったまま、捨てずにいるが、世間にとっては価値ある物があるのだ」というのです。「それを、私は敢えて拾うのだ」と先生は言っているのです。これこそ、報徳先生独自の考え方です。禅や儒教のように、「無の中に有を考える」のではなく、もともと価値があるものなのに、いまは「使われないでそのままになっているもの」のことをいっているのです。だれも、そこにあるのをしっけていても、普段は気がつかないものばかりです。それに、持っている本人がその「世間的な価値」に気がついていないのです。「それを捨てなさい。そうすれば、私が価値ある物にして、あなたや世間にお返し

しましょう」と、先生はいうのです。世の中の物や人をよく見ている、現役の施政家（administrator）で現実主義者の先生らしい素晴らしい発想です。「持っているのに、持っていない」— これこそ「二律背反表裏論」です。実は、これは、幼年から他人の持ち物を羨ましがる貧乏人（報徳先生も含めて）独自の「怨望」であるのかも知れません。他人の臍繰りの「箆笥（たんす）貯金」は羨ましいです。

具体例六つ こんどは、その「とても価値がある物をもっているのに、持っていないと思われるもの」を、先生は立ち所に六つも具体的にあげて見せます。ここからが、本番です。

翁はこう言われた — 「わが道は荒蕪（こうぶ：荒れた土地）を開くのを勤めとしている。その荒蕪には数種ある。①田畑が実際に荒れた荒地がある。また、②借金がかさんで、収穫を利息にとられ、収穫はあっても利益のないものもある。これは国にとっては生きた地であるが、本人にとっては荒地である。また、③土地が悪く、本年貢や雑税だけの収穫で、耕作しても利益のない田地がある。これはお上には生きた地であるが、下の者には荒地である。また、④資産があり金力があって、国家のために尽さず、いたずらに驕奢にふけて財産を費やす者がある。これは国家にとってもっとも大きな荒蕪である。また、⑤智あり才あって、学問もせず、国家のためにも思わず、琴棋書画（きんきしゅが）などをもてあそんで生涯を送る者もある。世の中のためにもっとも惜しむべき荒蕪である。また、⑥身体強壮でありながら、仕事をしないで怠惰・博奕（ばくち）に日を送る者もある。これまた自分のためにも人のためにも荒蕪である」。

【『二宮翁夜話』第九十二話「荒地に数種ある事」】

心の田の荒蕪 このように、報徳先生がいう「荒蕪」は六つもありました。なるほど、よく分かりました。確かに、この六つとも「捨てざるあるもの」、すなわち、「捨てないで残っているもの」です。私たちも、思い当たるふしが多々あります。ただ、持っているだけでは何の価値もありません。先代から受け継いだ大きな資産や持って生まれた才能や知恵や立派な身体 — そういった素晴らしいものに恵まれながらも、もったままで遊戯や博奕に明け暮れる怠惰な人々 — 「それが、最も勿体ないのだ」と先生はいうのです。「私が、拾うから早く捨てなさい」というのが、この「**人の捨てざるなき物を 拾い集めて 民に与えん**」の真意です。まあ、なんとも回りくどい説教です。でも、このように、「なにを言っているのかな？」と考えさせながら真理を説くのが「道歌」なのです。誤解を招き、多くの解釈を含み、明確さを欠くのも、諺や道歌の仕掛けです。要は、ボサッと生きている人たちに、なにかを考えさせるのです。

「この数種の荒蕪のうち、**心の田の荒蕪が国家のためにもっとも大きな損失**であり、つぎは田畑山林の荒蕪である。みな努めてこれを開拓しなければならない。この数種の荒蕪を耕し起こして、ことごとく国家のために供するのがわが道の勤めである。『**むかしより 人の捨てざるなき物を 拾い集めて 民にあたえん**』。これが私の志である」 【同】

国家のため 先生が言いたかったのは、実はこれです。「心の田の荒蕪」、すなわち、人々の「荒れた心」のことだったのです。「捨てざるなき物」は、単に物や金銭だけではなく、人の性格や趣味にまで及びます。「人間は、自分にとって一番大事な心というものを持っていないながらそれを知らない」というのです。「そのことを、知らせてやろう」というのが先生の勤めだというのです。「荒れた畑のようなお前の荒れた心を、わしが正しく耕して、また、お前に与えよう」というのが主旨だったのです。これも、「国家のためだ」というのです。この道歌は、極めて、重要で、偉大なことを語っているのです。

会田雄次の名言

さて、この会田雄次さんの本には、日本のリーダーになるための重要な示唆が数多く載っています。「庶民の無私精神」についてです。これも、「捨てるなき物」の一つです。ことのついでに、その二例をご紹介しますおきましょう。

1 司馬遼太郎の『坂の上の雲』について

「司馬遼太郎氏のその著『坂の上の雲』は日露戦争時、騎兵旅団を率いて活躍した秋山好古(よしふる)少将と、連合艦隊の先任参謀として日本海海戦の大作戦を樹立した秋山真之(さねゆき)中佐の兄弟を中心にして明治時代を描いた大長篇である。『坂の上の雲』とは近代国家というその雲を目指しひたすら歩んだ明治期を象徴してつけたものと著者はいう。ところでこの小説は日露戦争の終わったその瞬間にあわただしく終わりをつげる。秋山兄弟は尚その後生き、好古は私立中学の校長として光栄ある将軍としては一見奇妙な生活を送った。たしかに日露戦争は坂の頂上を意味し、ここで筆をおくのは自然としても、もうすこし爾後談(じごだん)に及ぶのがふつうだと思われるのに、正に突然という形で打ち切られるのである。なぜだろうか」【87頁】

これは、意外な疑問です。会田さんは、「この英雄の兄弟を誉め讃える後日談をもっと楽しみたいのに、肝心のそれがない」というのです。

「私には判るような気がする。以後の日本など書く気がしなくなったのだ。それは司馬氏だけの感慨ではあるまい。虎狼列強の中でうぶ声をあげたこの小島国が、その餌食にならぬよう全くの自力で自立して行った過程は、幸運に恵まれたとはいえ、全く奇蹟としか思えない。とくに心を打たれるのは、一般国民の涙ぐましいまでの国家への献身である。もちろんどんな社会にも反逆者、放埒な人間、貪欲な人間、権力欲につかれた人間はいる。だが明治期はそういう人間の発言力は現在とは正反対に極めて乏しく、しかも、かれら自体が、すくなくとも主観的には国家を憂う人々であった。それに対し **大多数の庶民たちの無私さはそんな状態がどうして生れたのか信じ難いほどである**。それが頂点にまで達したのが日露戦争だといえよう」。

「駆逐艦長で敵将ロジエストヴエンスキーを捕虜にするという幸運に恵まれた相羽恒三少佐は二十七日夜の水雷攻撃戦にこう語っている。『波浪にもまれて行くうち生死のことなど忘れてしまった。功名をしようという欲もなかった。ただ日本国家に仇をなす敵をほろぼしたいという一念のみで、いまこのときのことを思い出すと、自分にもあのような気高さがあったのかと、不思議な思いがする』。(中略)この最後の言葉のような **反省** は昭和期の軍人には全くなかった。自分たちだけが志士で、他のすべてが奸物(かんぶつ:心の曲がった悪い人・奸智にたけた人)とうぬぼれていた。明治の勤王志士たちも同じことで日本人の一番悪い面がそこに吹き出ている」。

反省と無私精神 相羽恒三少佐は、戦いの最中に起きた「国家を守ろう」という決意のありかを、後日、自分自身も不思議に思っています。「あのときはあったのに、いまはない」……このことを、会田さんは「反省」といっています。「捨てるなき物」を、少佐はなぜすてたのかを検証しています。偉業を成し遂げた本人でさえ、「いまは、あのような気高さはない」と言っていることを素直に「反省」と考えたのです。この「国家を守ろう」というのは、当時の軍人がもっている共通の「無私精神」であったからです。これは、明治人たちだけが持っていた「時代精神」でもあります。最初から「無私精神」をもたない現代の人たちは、一様に反省しようとしようがありません。これこそ、報徳先生のいう「捨てるなきもの」の言葉がピッタリします。

2 老いた松浦先生のこと

また、「無私の精神」については、この本に、素晴らしい子弟愛のお話も載っています。お話が素晴らしいだけでなく、それに添えられた会田さんの思いも素晴らしいのです。

【89頁】

「それはともかく、**明治の無私** ということでは庶民行動の方がより感動的である。桜井忠温氏の『肉弾』や『銃後』にはその無数の例が出て来る。かれが二〇三高地で重傷を負い内地に送還されたとき、十五歳のときから絵を習っていた「松浦先生が見舞に來た。『お前が難儀をして來たのに俺が車や船に乗って來ては勿体ない。俺や歩いて來た』といわれたときに、予は先生を拝して男泣きに泣いた。七十余歳の先生は草鞋(わらじ)を穿(は)いて、実に五十里の峽道(けんどう:険しい道)を踰(こ)えて來られたのである」と記している。**今日では自分に直接しないことに献身した他人に対し勿体ないと思う感覚など完全に欠如している。** それどころか、そんな人間を馬鹿扱いにするのがふつうである」。

このお話から、「今日では自分に直接しないことに献身した他人に対し、勿体ないと思う感覚など完全に欠如している」という現代を批評した会田さんの解釈は素晴らしい。会田さんは、松浦先生が、自分の弟子が、二〇三で活躍して国家を救ったことを誉め讃えるためだけに遠路を歩いてやってきたことに感動しているのです。これこそ、自分の弟子を「勿体ない」と誉め、引いては自分の国を思う、これこそ一庶民の「無私の精神」の現われだと会田さんはいうのです。明治は良い時代でした。これも、報徳先生のいう「捨てざるなきもの」そのものです。ここでも、「いまは、そうではない」と会田さんは現代の日本の庶民を非難するのです。

「[無私の精神がなくなるという] この急激な変化は日露戦争の勝利とともに一挙に現われた。それ以後の日本と日本人はもう以前の日本人ではない。野卑、傲慢、実力なしでの大言壮語、些細な障害に我執を爆発させる物欲だけの国民となった。その状況は目を被わずにはいられない。司馬氏が筆をとめたのも当然といえよう」。

会田さんは、「明治以降の大正・昭和の人間は、もう、小説に書くに耐えないほど墮落している」というのです。その原因は、「日露戦争で勝ったことにある」と言います。この勝利が、日本人を、肝心の無私の精神を忘れた自慢タラタラの物欲だけの増長した国民にさせたと言うのです。

「今度[太平洋戦争]の敗戦で日本は悔い、変化したかに見えた。しかし、実は変らなかったのである。いや、変ったのは惨敗によって戦争恐怖に陥ったという点だけであろう。どうも明治前半の[優れた]日本人が異常であって、**日本人の本質は凶に乗る浅薄で虚勢的人間** のようである」。

口の悪い会田さんらしい手厳しさです。では、優れていた明治の人間とその後の墮落した日本人とは、どこがどうちがうのでしょうか？

3 精神の鍛錬について

「日露戦争で陸軍は兵の数こそおとれ武器はそう格差はなかった。日本海海戦ではこちらの方がうんと優れていた。たしかに精神力の優越はあったろう。しかし、この大勝で軍部をはじめ国民は精神、即ち日本人の人間の本質それ自体が優越しているという途方もない増上慢に陥った。そして今度の敗戦を招いた。精神さえ立派であれば物質はどうでもよいと考え、しかも、**その精神は鍛錬もなしに優越していると考えた** のだ」。

会田さんは、「日本人は、どの国よりも優れた精神を持っている」という奇怪な精神主義がそうさせたのだと言います。ここで、会田さんは、「真の精神の鍛錬」の必要性をなんども説きます。やはり、「精神そのもの」が問題なのです。これも、報徳先生のいう「心の田の荒蕪」を耕すのです。奇怪な精神ではなくて、「鍛錬された真の精神」が求められているのです。

「敗戦は物質の大切さを認めさせはしたが、この奇怪な精神主義の基盤は変わらない。それが流行の、心さえ純真ならばという奴である。成績で区別はけしからん、真面目な人間を大切にせよ、大衆の心は立派、支配者は悪。真面目人間だけが損をする世界等々の主張である。国家主義でないということで戦前と異質だと思ってはならない。そこには**精神の鍛錬という感覚**がすっぽり抜け、自分の心は天然自然に立派だという増上慢(ぞうじょうまん:自分だけでおごりたかぶること)だけが支配していることで共通している。装いが変わっただけで精神構造そのものには変わりなく、むしろ私たちの国民性の最悪だけが肥大して来ているのだといってよい」。

名著も捨てずにある この「鍛錬」という言葉の語源は、宮本武蔵の『五輪書』にある「千日の稽古をもって鍛となし、万日の稽古をもって錬となす」にあるといわれています。これは、大変な修行です。精神を正しく鍛えるには、千日も万日も稽古を必要とするのです。では、どうやって、精神を鍛錬すれば良いのでしょうか？ それは、今まで学んできた『報徳記』と『学問のすゝめ』を、千日と万日掛けて、読むことにつきますのです — というのが今編のオチです。(笑い) いえ、これは冗談ではありません。報徳先生のいう「人の捨てざるなき物」とは、こういった、日頃近づきにくい名著のことでもあるのですから。

また、報徳先生のお話に戻しましょう。

善悪同服

5 見渡せば 遠き近きはなかりけり 己々（おのれおのれ）が住处（すみか）にぞある

これも私の好きな歌で、また、下手な歌です。「善・悪」を論じた道歌で、その主旨と説明が抜群にいいのです。感動します。でも、すんなりとは分かりません。

【『二宮翁夜話』第二十六話】

翁はこう言われた — 「善悪の論は、はなはだむづかしい。根本を論ずれば善もなく悪もない。善といって分けるから悪というものができるのだ。善悪は人間の考えからできたもので、人道上のものだ。それゆえ、人がなければ善悪はなく、人があってのちに善悪があるのだ。だから、人は荒地を開くのを善とし、田畑を荒らすのを悪とするが、猪や鹿の方では、開拓を悪とし、荒らすのを善とするだろう。世の法は、盗むことを悪とするが、盗人のあいだでは盗むのを善とし、これを押える者を悪とするだろう。だから、どれが善か、どれが悪か。この理由は明らかにしがたい」。

善悪と遠近 なるほど、立場と立ち位置によって「善・悪」は決まるのですね。先生は、「善と悪とは、絶対的なものではない」というのです。それは、「遠・近」でも同じです。同じ場所でも、こちらかでは近くても、あちらからみれば遠いのです。簡単に敵・味方を決めてはなりません。

「この理由のもっとも見やすいのは遠近である。遠近というのも善悪というのも原理は同

じだ。たとえば、杭を二本作り、一本には遠と記し、一本には近と記し、この二本を渡して、『この杭をお前のからだより遠い所と近い所と、二カ所に立てろ』と言いつければすぐに分かる」。

遠くにある柱と近くにある二本の柱が、「善と悪だ」というのです。どういうことでしょうか？

「私の歌に、**見渡せば 遠き近きはなかりけり 己々が住処にぞある** というのがある。この歌を、『善きもあしきもなかりけり』とすれば、人身につきすぎていて分からない。遠近は人身についていないからよく分かるのだ。工事で土地の曲がり具合を眺める場合、あまり目に近すぎるときは見えないものだ。だが遠すぎてもまた視力は及ばない。古語に、『遠き山木なし、遠き海波なし』というのと同じだ。[なんのことだかよくわかりません]それで、自分の身に関係の薄い遠近に移して諭すのだ。遠近というものは、自分のいる所がまずきまって、のちに遠近があるのだ。いる所がきまらなければ遠近は決していない。大坂を遠いと言うのは関東の人だろう。関東を遠いと言うなら上方の人だろう」。

「禍福・吉凶・是非・得失はみなこれに同じだ。禍福も一つ、善悪も一つ、得失も一つである。もと一つの物の半分を善とすれば、半分は必ず悪である」。

怨望が働く なるほど、先生の言わんとするところは分かりました。自分のためにならないのなら、街中を、これ見よがしに我がまま勝手に走り廻る高級外車のように、世の中のモノの半分は騒がしい悪なのです。「善・悪」は、物事を、勝手に見る方で決めているだけであって、本体そのものは善でもなく悪でもないのです。ここには、多分に、自分の「善」だけを望む個人的な「怨望」が働きます。ランボルギーニは、羨ましいです。

「ところが、[人間は] その半分に悪がないことを願う。これはできがたいことを願うというものである。人が生まれたのを喜ばば、死の悲しみはついて離れない。咲いた花が必ず散るのと同じであり、生じた草が必ず枯れるのと同じである。(中略) 死生はもとより、禍福・吉凶・損益・得失みな同じだ。もともと禍と福とは同体で一つのものだ。吉と凶とは兄弟で一つのものだ。すべてのことはみな同じだ。いま人を害しても、[金目の物を] 盗みさえすれば善とすることであろう。ところが、世の法は、盗みを大悪とする。そのへだたりはこのようなものだ。天には善悪はなく、善悪は人道で立てたものである」。

なるほど、最近のこの地球の「力による平和」と「法の支配なき時代」もまた、人道の立てた善・悪によって進められています。従って、国際的な遠い立位置から判断すべきものです。むろん、判断するのは、力ある者たちであり、法を犯した側にあります。

「たとえば草木のごとき、何の善悪があろう。それを人の側からして、米を善とし、莠(はくさ:雑草)を悪とする。食物になるかならないかのためである。天地にどうしてこの区別があろうか。莠は生ずるのも早く育つのも早い。天地生々の道にしたがうことがすみやかであるから、[天道からすれば] これを善草といってもさしつかえなかろう。米や麦のごとく、人力をかりて生ずるものは、天地生々の道にしたがうことがはなはだ迂闊であるから、[人道からすれば] 悪草といってもさしつかえなかろう。ところが、[この世に生える物を] ただ食えるか食えないかをもって善悪を分けるのは、人の都合から出た片よった見方ではないか。この原理を知らなければならない」。

この原理を知るべきなのは、これもまた、力と法を支配する者たちです。常に、相手のことを考えるのが「仁」です。

「上下・貴賤はもちろん、貸す者と借りる者、売る人と買う人、人をつかう人と人につかわれる人に引きあてて、よくよく思考してみるがよい。世の中の万般のことはみな同じだ。あちらに善であればこちらに悪であり、こちらに悪いことは彼にはよい。生物を殺して食う者はよかろうが、食われるものにははなはだ悪い」。

先生は、「善・悪を決めるのは、その人が立っているそれぞれの立場にある」というのです。でも、いまの地球は、喰えない人たちで溢れています。戦争による難民は、自ら選んだ道に立っているではありません。仕方なく、難民にさせられた人たちです。この先生の人の都合から出た「善・悪の論理」は、難民に向けられたものではありません。難民である彼らは、「善・悪の論理」の被害者です。「喰われるモノ」の立場です。「世の中の万般のことはみな同じ」であるので、常に相手の立場に立って考えて見ましょう。

自分の都合 商品の売買や雇用関係など、経済活動そのものは善でもなく悪でもないのに、「善・悪」を問うのはその人の置かれた立場によるのです。客観的で、絶対的なものではありません。自分の受けた都合で決めているのです。ですから、物事の「善・悪」を勝手に、自分だけの損・得に合わせて決めてはいけません。特にそれが、怨望の多い人間がすることですから、世間のすべての物事を根本的に間違えてしまう原因になるのです。相手のことを考えましょう。すなわち、「仁」です。

傲慢な人間 でも、人間、生きていく上で「善・悪」の判断はどうしても出てきます。例えば、生きていくには、まず、なにか食べなければなりません。自然が作ったものには、食べられる物と食べられない物があります。人間にとって食べられる物は「善」で、食べられないものは「悪」です。この感覚はすべての人間にあります。「世界は自分のために作られている」という傲慢さです。

「[なるほど] そうはいっても、すでに人体があり、生物を食わなければ生きていくことができないのをどうすることもできない。米・麦・蔬菜(そい)といっても、みな[天道が作った] 生物ではないか。私は、この原理を尽して **見渡せば 遠き近きはなかりけり 己々が住処にぞある** と詠んだのだ。けれども、これはその原理を言っただけである」。

天道すべて善ではない 「天道である自然が作ったものがすべて、人間にとって『善』であるとは言えない。人間は、そこを知らなければならぬ」と先生はクギを刺すのです。ここで、先生お得意の比喩がでてきます。例の「山に四角木なき咄」です。これは先の「二律背反表裏論：1 天道か、人道か？」でご紹介したように、先生は、「どこの国の山林にも四角な木はない。また、皮もなく骨もないかまぼこやはんぺんのような魚もない。粳(もみ)もなく糠(ぬか)もない白米のような米もない」といいます。「これがあれば、人の世にはこのうえもない利益であるが、天はこれを生じない」といいます。このことは、人間が如何にそれを望んでも、天道と人道とはまったく別の目的をもった物であることを示しています。

「人は米食い虫だ。この米食い虫の仲間て立てた道は、衣・食・住になるべき物を増殖するのを善とし、この三つの物を損害することを悪と定めている。人道でいう善悪は、これを定規とするのだ。これに基づいて、すべて人のために便利であるのを善とし、不便利になるのを悪と定めたものであるから、天道とは別のものであることはいうまでもない」。

四書五経を重んじ、仏教を信奉し、「仁」を珍重する日本人は、自(おの)ずから「天道」を敬います。「人道」は、「天道」と違って、人間的で、欲張りで、勝手に、悪い物だと思います。「いや、そうではないのだ」と先生はいいます。

「しかし、[人道が] 天道に違うわけではない。天道にしたがいつつ、違うところがある道理を知らせただけだ」。

勤労を怠らない なるほど、先生の仰りたいのは、「人間は勝手に、物事の善・悪を自分のためになるかならないかで決めているが、すべてのものが人間のためにあるのではないのだ」と言うことです。そしてさらに、「とはいえ、先ずは天道に従いつつ、人道の働きを決して忘れないことだ」というのです。要は、天道に従いながらも、勤労を怠らないとする日々の務めが大切なのです。この勤労のおかげで、人は、天の恵みである稲を精米して食べ、魚は骨をとって食べ、家は角材を使って家を建てることが出来るようになったのです。先生は、このことを誉めたりしません。精米や調理や木材加工を、面倒だと思ったり、危険だと思ったりしているだけでは駄目なのです。人は人なりに、天道に感謝しながら、智恵と身体を使って、日々、働くことです。

報徳先生は、また、別のところでこう言われた — 「儒教で循環といい、仏教で輪廻転生というのは、すなわち天理である。循環とは、春は秋になり、暑は寒になり、盛は衰に移り、富は貧に移ることをいう。輪転(りんてん)というのもまた同じことだ。そして仏教では輪転を脱して極楽に往生できることを願い、儒教では天命を畏れ、天につかえて泰山の安きを願うのだ。私の教えるところは、貧を富にし、衰を盛にし、そして循環・輪転を脱却して、富盛の土地に住むようにする道だ」。

輪転から脱却 「貧を富にし、衰を盛にする」 — これが、先生の言う「環(かん)の理」です。それは、儒教の循環と仏教の輪廻転生を脱して、安定した富み栄える村に住むことです。その極意は、「年切り」(ねんぎり)を防ぐことです。

「果物の木というものは、今年大いに実ると翌年は必ず実らないものだ。これを世間で**年切り**という。これは循環・輪転の理でそうなるのだ。これを人為をもって年切りなしに毎年ならせるには、枝を伐りすかし、また苔のときにつみとって花をへらし、数度肥料をやれば、年切りなしに毎年同じように実るものだ。人の身代に盛衰・貧富があるのは、すなわち年切りである。親は努力するが子は遊惰とか、親は節儉であるが子は贅沢とか、二代・三代と続かないのは、いわゆる年切りであって、循環・輪転である。この年切りがないことを願うならば、果物の木の法にならって、私の **推譲(すいじょう)の道**をすすめるべきだ。**環の理**だ」。

年切りを断つ ここで先生は、急に、「年切り」と「推譲」と「還の理」と三つのことを言い出しました。先ず、「年切り」ですが、これは果物の木が、よく実った年の翌年には、決まって不作になることです。木々の勢力や養分やエネルギーが、遂に枯渇してしまうのです。一年ごとに、豊作と不作が循環的に起きるのです。このことを、「年切り」というのです。この年切りを防ぐためには、人は、日々色々な補給作業をしなくてはなりません。これと同じ「年切り」は、人の身代にも及びます。長者が二代目や三代目になると破産することが起きます。これは、息子たちや後継者の能力や辛抱や意欲が衰えてついには力尽き倒れることといいます。この人間の年切りを断つには、「推譲(すいじょう)が必要だ」と先生はいうのです。「推譲さえあれば、年切りもなく、すべてが順調に循環する」のです。同時に、先生は「環の理」も説きます。

先ず、「推譲」です。

先生は言います — 「いったい、人道は天道とは異なるもので、譲道から成り立つものだ。譲とは、今年の物を来年に譲(ゆず)り、親は子のために譲ることから成り立つ道である。

天道には譲道はない。人道は人の便宜を計って立てたものだから、ややもすると奪おうとする心が生ずるのだ。鳥獣はまちがっても譲心の生ずることはない。これが人畜の違いである。田畑は一年耕さなければ荒地となる。荒地は百年たっても、自然に田畑になることがないのと同じである。人道は自然のものではなく、作為のものであるから、人が用に立てているものは、作ったものでないものはない。それゆえ、人道は作ることを勧めるのを善とし、破ることを悪とする。万事自然にまかせておけば、みな廃れる。これを廃れないように勧めるのを人道というのだ。

「人の用いる衣服の類、家屋に用いる四角な柱・薄い板の類、そのほか白米・揺麦・味噌・醤油の類は、自然に田畑・山林に生育するものではない。そこで人道は、勤めて作ることを尊び、自然にまかせて廃れるのをにくむ。虎や豹はもちろんのこと、熊や猪のごときは木を倒し根を掘ってしまい、強いことはいうまでもない。その労もまた言葉では言いつくせない。しかも終身労して安堵の地を得ることができないのは、譲ることを知らないで、生涯自分のためにつくすだけだから、苦労しても功労がないのだ。たとえ人であっても、譲の道を知らないで、勤めなければ、安堵の地を得ないのは禽獣と同じだ。そこで、人間たる者は、智慧はなくても、力は弱くても、今年の物を来年に譲り、子孫に譲り、他人に譲る道を知って、よく実行したならば、その功労は必ず成就しよう。その上にまた、恩に報いる心がけがある。これも知らなくてはならず、勤めなくては成らない道だ」。

【『二宮翁夜話』第百七十七話「譲論」・162頁】

翁は、さらに言われた — 「譲は人道だ。今日の物を明日に譲り、今年の物を来年に譲る道を勤めない者は人にして人ではない。十銭取って十銭使い、二十銭取って二十銭使い、宵越しの金を持たないというのは鳥獣の道で人道ではない。鳥獣には今日の物を明日に譲り、今年の物を来年に譲るという道はない。人はそうではない。今日の物を明日に譲り、今年の物を来年に譲り、そのうえ子孫に譲り、他人に譲るという道がある。雇人となって給金を取り、その半分を使って、半分は将来のために譲り、あるいは田畑を買い、家を建て、蔵を建てるのは子孫へ譲るためだ。これは世間の人知らず知らずに行なっているところで、これがすなわち譲道だ」。

私たちも、簡単な「譲道」は日頃行っているのです。

「だから一石の者が三斗を譲ることはできがたいことではあるまい。なぜならば、自分のための譲るのだからだ。この譲は教えなくてもできやすい。これより上の譲は教えによらなければできがたい」。

これは、自分の身内のことだからです。でも、先生は、さらに上を行きます。

「これより上の譲とは何か。親類・朋友のために譲るのだ。郷里のために譲るのだ。もっとできがたいのは国家のために譲ることだ。この譲もつまるところは、わが富貴を維持するためであるが、眼前に他に譲るからできがたいのだ。家に財産のある者はつとめて家法を定めて推譲を行なえ」と。 【『二宮翁夜話』第七十九話「推譲論」・82頁】

なるほど、街や自治体のために我が資産を譲るのはなかなかできないものです。市民税を納めるだけで精いっぱいです。更には、国家の為にも、「譲れ」といいます。まあ、考えておきましょう。

次いで、循環の道理：天の理

そして、「環の道」です。

翁はこう言われた — 「この世界で、咲く花は必ず散り、散るといってもまた春が来れば必ず花が咲く。春に生ずる草は、必ず秋風に枯れ、枯れるといってもまた春風にあえば必ず生ずる。万物みなそうだ。されば無常というも無常でなく、有常というも有常ではない。種と見る間に草と変じ、草と見る間に花を開き、花と見る間に実となり、実と見る間にもとの種となる。されば、種となったのが本来か、草となったのが本来か、これを仏教では不止不転の理といい、儒教では循環の理という。万物はみなこの道理をはずれることはない。」
【『二宮翁夜話』第百十三話「循環の道理」・129頁】

「種から花」「花から実」「実から種」へとつづくこの繰り返しの「環の道＝循環の理」は、譲道の結果に起きる幸せな「道」です。すなわち、世間に推譲を尽くし、自らは「つづいて止まぬ、一家、富優の生活」を送るのです。めでたし、めでたし。

浄・不浄の論 最後に、循環の例をもう一つ。

翁はこう言われた — 「お前たちも勉励せよ。今日、隅田川にかかる永代橋の上から眺めていると、肥(こ)え取り船に川水を汲み入れて肥えを増しているのだ。人々の最も嫌う肥えを取るばかりでなく、こういう汚物すら増せば利益のある世の中だ。まことに妙ではないか。すべて万物は極端に不浄になれば必ず清浄に帰り、清浄が極まれば不浄に帰る。寒暑・昼夜が回転して止まないのと同じだ。すなわち天理だ。すべての物はそうなのだ。されば世の中に無用の物というのではないのだ。農業は不浄(肥え)をもって清浄(農作物)に替える妙術だ。人が馴れて何とも思わないだけのことだ。よく考えれば、まことに妙術というべきで、尊ぶべきだ。私の方法もまたそうだ。荒地を熟田にし、借財を無借にし、貧を富にし、苦を楽にする方法だからである。」

【『二宮翁夜話』第二百二十話「浄・不浄の論」129頁】

汚くて綺麗 さすが、報徳先生、目の付け所が違います。橋の上から、なにを見ているかと言えば汚穢舟(おわいぶね)です。畑に肥(こやし)として撒く人糞を運んでいるのです。その人糞に、こっそり川の水を注(さ)して量を増やして売るのです。誤魔化しです。でも、先生はそれをズルイとして怒るのではなく、反対に、誉めているのです。「みんなが嫌い、汚くて捨ててしまう汚物でも、上手く利用すれば世間のお役に立つのだ」と感心しているのです。不浄なものが浄になるのです。利益も生みます。「すべてのものが、不浄から浄へ、汚物から栄養へ、無用から有用へと回転してやまない。これが、天の理(真実)である」と説くのです。流動的な考えです。これも、劣勢である相手のことを大事にする「仁」の効用です。常に相手のことを考えるのが「仁」です。今、現在、評価が低くても、なにか利用価値があるものです。それが、「仁」です。この世に無駄なモノはありません。

綺麗なようで汚いお話

では、ついでに、綺麗なようで汚いお話を、もう一ついたしましょう。明治40年頃、時の総理の西園寺公望卿が、恒例の雅園に夏目漱石を招待しました。こういう席が苦手な漱石は、断りました。その返事の手紙に書き添えた句があります。

時鳥 廁 半ばに 出かねたり 漱石 (ほととぎす かわや [便所] なかばにでかねたり)

【2025/06/29 都築正道】